

古文と漢文の知識を融合させた深い学び

—『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」を題材として—

国語科 秋長幸依・野見山亜沙美

【要旨】

「国語」という教科は「現代文」・「古文」・「漢文」に分けて学習することが多いが、「漢文」の思想や知識は「古文」の読解にも深く関わってくる。本授業では、『枕草子』第二八〇段「雪のいと高う降りたるを」を用いて「漢文」から「古文」を読み解き、さらに『枕草子』に関する評論文を読んで、深い学びへとつなげることを目的とした。本稿は、その科目横断的な実践を記したものである。

キーワード：国際バカロレア教育、主体的・対話的で深い学び、協同学習、科目横断

1. はじめに

本校は現在、国際バカロレア（以下、IB）教育のディプロマ・プログラム関心校として研究に取り組んでいる。IB では、「国際的な視野をもつ人間の育成を目指して（文部科学省、2019）」、「人類に共通する人間らしさと地球を共に守る責任を認識し、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する人間を育て（同上）」るために、「10 の学習者像」を設けている。これらのうち、「探究する人」・「考える人」・「コミュニケーションができる人」・「心を開く人」の学習者像を意識して、国語科教員 2 人で現代文・古文・漢文分野を融合させた協同授業を行った。

また、2018 年 3 月 30 日に高等学校学習指導要領の改訂が行われ、現在は新学習指導要領への移行時期でもある。中央教育審議会答申においては、「話合いや論述などの『話すこと・聞くこと』、『書くこと』の領域の学習が十分に行われていないこと（文部科学省、2018、p.8）」や、「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないこと（同上）」等が、高等学校の国語科の課題として指摘されている。これを受けて、今回の改訂の基本方針には、「『主体的・対話的で深

い学び』の実現に向けた授業改善の推進（文部科学省、2018、p.3-4）」が、一つの項目として挙げられている。本授業では、講義型授業だけではなく、「話すこと・聞くこと」および「書くこと」を重視し、「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる授業を目指した。

2. 授業案

（1）対象

本校 第 1 学年の生徒 164 名

国語総合（4 単位）

- ・現代文分野（週 1 時間、授業者：秋長）
- ・古文分野（週 2 時間、授業者：野見山）
- ・漢文分野（週 1 時間、授業者：秋長）

（2）教材

2018 年 12 月から 2019 年 3 月にかけて、次の 3 つの教材を用いて、①～③の順に授業を行った。

①漢詩

『白氏文集』「香炉峰下新卜山居草堂初成偶題東壁」（『国語総合 古典編』東京書籍 2018）

②古文

『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」（『国語総合 古典編』東京書籍 2018）

③現代文

山本淳子『枕草子のたくらみ』（朝日新聞出版、2017）「はじめに・第一章」より

（３）目標

漢詩『白氏文集』「香炉峰下……」の知識を踏まえて、古文『枕草子』「雪のいと高う降りたるを」を鑑賞する。その次に、『枕草子』を題材とした評論文『枕草子のたくらみ』を読むことで、『枕草子』の成立や清少納言についての理解を深める。いくつもの教材を読み重ねたり、クラスメイトと意見を交流したりすることで、自分の中で様々な知識がつながる・深まることを実感させ、古典教材への興味関心を高めることを目標とした。

（４）授業構成

以下に、学習①～③それぞれの授業の概要とねらいを記す。

①漢詩「香炉峰下……」

この教材の前に、孟浩然の「春暁」を学習し、作品の表面上だけを読み取っても、その文学作品の真意は分からないことを確認した。作者や時代背景等を知る必要があることを示唆したうえで、本作品でも同様のことを確認しながら鑑賞をした。漢詩 2 作品の鑑賞を通じて、作品そのものに触れるだけでは、文学を理解したとは言いがたいことに気付いてもらうことが目的である。

また、学習②の前振りとして、『白氏文集』が日本の平安貴族にも愛好されていたことを簡単に紹介した。

②古文「雪のいと高う降りたるを」

学習①とほぼ同時進行で『枕草子』の学習に入った。初めに第七二段の「ありがたきもの」を学習し、『枕草子』本文の雰囲気や作者である清少納言の人柄に触れたのちに第二八〇段「雪のいと高う降りたるを」を一読させた。未学習の単語や分かりにくい文法を確認し、本文「御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。」までの現代語訳に努めた。

そこで、漢文のノートとプリントを持参させ、演習プリント（B4 横置き、左上に「第 1 回目」、左下に「第 2 回目」、そして右の上下に「第 3 回目」「第 4 回目」とだけ書き、それぞれ大きな空欄を作っただけのもの）を配布した。まず「第 1 回目」の欄に「なぜ清少納言は御簾を高く上げたのか？」という問いを書かせ、持参した漢文のノートとプリントを参照した上で考えるよう指示を出した。

次に、本文「人々も、『さることは知りへべきなめり。』と言ふ。」の単語と文法を確認し、現代語訳して書かれている内容を理解する。章段すべての内容を理解した上で「なぜ清少納言は御簾を上げるという行動で返事をしたのか？」という問いを投げかけ、演習プリント「第 2 回目」の欄に書かせた。

③現代文『枕草子のたくらみ』

学習②を受け、入試休み期間中（2 月上旬）の課題として本文（B4 用紙両面刷り 2 枚分）を渡し、本文のポイントを整理・要約させる問いに取り組みさせた。課題提出後、生徒が書いた解答のいくつかを提示しながら、授業で本文の読み取りを進めていった。

そして、清少納言を含む女房達に定子がどのような知性を求めていたのかを本文から読み取った後に、学習②の続きとして、演習プリントの「第 3 回目」で「第 2 回目」と同じことを問うた。ただし、『枕草子のたくらみ』の本文に根拠を求めて解答することを、条件として追加した（授業時間の都合により、「第 3 回目」の記述は 2 クラスでのみ実施）。学習②の内容理解を深めたり、別の視点を踏まえて考えたりすることを目的とした。

次に、『枕草子』が定子に捧げるための作品であったことや、定子の凋落していく人生とその死を本文から読み取った後に、演習プリントの「第 4 回目」では授業の感想を書かせた。なお、その際には、漢文・古文・現代文の授業を通じて、作品の読みを深めていったことを考慮して書いてほしい旨を伝えた。複数の教材を用いたスパイラ

ル（らせん）的な学習を経て、生徒自身ができるように感じて何を学んだかを、生徒の自由記述をもとに、後の第3部「授業実践・考察」で考察していきたい。

3. 授業実践・考察

以下に、学習①～③それぞれの授業についての実践内容と、生徒の授業中の発言や演習プリントの記述をもとにした考察とを記す。

①漢詩「香炉峰下……」

作品のタイトルの現代語訳を確認したあと、作者である白居易について人物紹介をした。科挙の三つの試験に続けざまに合格するほどの優秀な人間であったこと、平易で分かりやすい彼の文体が後の科挙の受験者たちの手本とされていたこと。そして、エリート官僚だったが長安での事件をきっかけに左遷され、この作品のタイトルにある「草堂」を築くに至ったこと。これらを踏まえて、詩の鑑賞・解説を行った。

詩全体の現代語訳を確認したあと、「作者は、この詩でどのようなことを伝えようとしたのか。白居易の人生と照らし合わせて考えてみよう。」と問いかけをして、ペアワークで話し合いをさせた。どのクラスでも、詩の中で最も伝えたいのは、反語表現を用いている「心泰身寧は帰処／故郷何独在長安」の尾聯二句であるという指摘がなされた。その解釈については、草堂での悠々自適な生活を心から楽しんでいるという、詩の言葉を素直に受け取った意見が多かったが、4クラス中3クラスでは白居易の人生を踏まえた意見も出てきた。すなわち、エリート街道を突き進むかと思えた白居易が、彼に反感を抱いている周りの思惑によって左遷されたのだとしたら、本心で尾聯二句を書いたとは思えないという解釈である。本当は長安に心残りがあるのに、あえて強がってこう書いたのではないか、という趣旨の意見が提示された。すると、それを聞いたクラスメイトからは、そういう見方もあるのかという声が漏れてきた。

たしかに、「草堂の安らぎに満たされながら、なお長安の名を出さざるを得ないことを、もちろん過大に受け取る必要はないだろう（齋藤、p.140）」という見方もある。しかし、「自己の境遇を納得しようとしても、思いきることのできない白居易の真情が吐露されている（山口、p.103）」や、「まだ悟り切れておらず、こういう詩を書いてなんとか自分を納得させようとしている（宇野・江原、p.118）」というような解釈をすることも可能であろう。こういった解釈は、作者や時代背景等を知っていてこそ生まれるものである。どちらの解釈が正しいか間違っているか、が問題なのではない。文学作品を広く深く楽しむためには、関連する背景知識を知っていることが大切であることを、生徒たち自身が気付けたことが、この単元での成果であり、学習②・③への伏線ともなっていた。

②古文「雪のいと高う降りたるを」

a. 学習前の予備知識

『枕草子』について、多くの生徒がそれなりの知識を持ち合わせていた。「冒頭文教えて」と言うとき声を揃えて「春はあけぼの～」と暗唱し、一部「冬はつとめて～」まで覚えている生徒もいた。作者名や成立した時代などについても同様である。しかしその内容が、宮中で見聞したさまざまなことを鋭い感性で書き留めたものであること、それが後に「をかし」の文学として評価されたことなどについては知らない生徒が多いようであった。

また、作者が清少納言であることは知っていても、「じゃあ清少納言ってどんな人？」と問いかけてみるとたちまち静かになってしまう。彼女が、学者や歌人として名高い清原元輔の娘であったこと。学問の知識に富み、当時は女性の教養として不要とされていた漢学の知識にも造詣が深かったこと。勝ち気で明るい性格であり、才子であった藤原公任や藤原行成などとも堂々と張り合っていたらしいことなどを便覧等を用いて紹介し、生徒たちの中にある程度の「清少納言像」が構築できた上で、第七二段「あ

りがたきもの」の学習へと移った。

b. 第七二段「ありがたきもの」

いわゆる「ものづくし」と呼ばれる、類従的章段の一つである。学習にあたり、時代背景や清少納言の人柄をよく知ることのでき、さらに生徒たちの興味を引きつけることのできるような章段を選んだ。「ありがたし」や「かたみに」などの単語学習、係り結びの復習、今までに習得した助動詞を使つての現代語訳など文法的な学習をした後、「清少納言が挙げた『ありがたきもの』の中で一番納得できたものを選び、その理由を書く」という課題を与えた。さらに今現在の自分たちが考える「ありがたきもの」を本文の形式に似せて書かせるなど、出来るだけ『枕草子』や清少納言という人物を、生徒たち自身の身近な存在として近づけられるような授業展開を試みた。

c. 第二八〇段「雪のいと高う降りたるを」

この章段に入る前に、清少納言が女房として仕えていた中関白家について簡単に説明した。その際、後に行われる現代文の授業を考慮し、定子と清少納言の関係性に関しては最低限の説明に留めた。そして漢文の授業で「香炉峰下……」の漢詩を学習し終えた時期を見計らい、何食わぬ顔で本文を配布すると、「あれ、これ……」と数人の生徒が何かに気付いたような様子を見せていた。一度全員で音読するとざわつきも大きくなる。しかし、高校一年生にとって「雪のいと高う降りたるを」の本文は非常に難解である。特にまだ謙譲語や丁寧語はしっかりと学習できていなかったため、「御格子参りて」や「集まり候ふに」などの箇所には傍訳を施しておいた。助動詞はすべて学習済みであったので『少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。』と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。』の二重傍線部に着目させつつ主語を特定させた。それにより「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」と言った人物が中宮定子であることを確認することができた。

ここまで現代語訳した後には演習プリント

を配布し、「なぜ清少納言は御簾を高く上げたのか？」という問いを投げかけた。その際、「この問いを考えるために何が欲しい？何が見たい？」と聞くと、「漢文のノート！」と返ってきたため、持参させていた漢文のノートやプリントを出すよう伝えた。そして、漢詩「香炉峰下……」の中からその答えとなりそうな箇所を抜き出した上で説明するように指示を出し、まずは一人で考える時間を五分ほど設けてから、難しければ隣や前後と相談しても良いものとした。

抜き出すべき箇所、つまり「香炉峰雪撥簾看」は比較的多くの生徒がすぐに気付いて書き出していた。しかし、答えの根拠となる要素を使い、自分の言葉で問いに答える力はまだまだ足りていないように思われた。以下、生徒の答えの一部を挙げる。(波線部執筆者、原文ママ)

——一定子に、香炉峰の雪の様子を聞かれたが、御簾を上げないと外の雪の様子が見られない状態だったから。——

——漢文「香炉峰の雪は簾を撥げて見る」というところからも、雪を見るためにあげた。——

相談タイム中、「え、香炉峰って中国やんな？」「見えるのかな？」などの声が時折聞こえてきた。清少納言は本物の香炉峰の雪を見せようとしていたのか、という根本的な問題である。さすがに見えないだろうという結論に至っても、「雪を見せようとしたから」という解答以外は浮かばなかったらしい。

——白居易の文章に「香炉峰の雪は簾を撥げて見る」とあるので、清少納言もその通りにした。——

——白居易が「香炉峰の雪は簾を撥げて看る」といっており、清少納言は定子がそのことを言っているんだと思い、御簾を上げた。——

雪を見せようとしたのではないこと、そして漢詩の内容と状況が一致していることに

気付いた生徒たちも多くいた。しかし、「なぜその通りにしたのか」という、その理由までは触れられていない。また、「そのことを言っている」、つまり「定子が、白居易の漢詩について少納言に何かを求めている」ということであろうが、この書き方では不十分である。

——一定子が清少納言が漢文学に通じているのかどうかを試してきたので、清少納言はそれを証明するため文と同じように“香炉峰の雪を見るために簾を上げる”という動作をする必要があったから。——

ほぼ満点とっていい解答だろう。「香炉峰の雪を見るために」と、漢詩の内容引用に多少の問題点はあるものの、定子が清少納言の持つ漢学の知識を試したということ、それに答える形で御簾を上げたのだということに気が付いている。「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ。」という言葉が定子による謎かけであったことに関しては諸説あるため後述するが、ここまで読める鋭い視点を持っていることは素直に嬉しく思える。

——見ることのできるはずのない「香炉峰」はどうか？と聞いた質問の言外には、この香炉峰の漢文を知っているか、という意図が込められている。現代でいう一種のクイズのようなもので、暗黙のルールを教養の高さゆえに理解し合える楽しさがある。この「御格(マ)を上げる」という行為は教養があるゆえの清少納言の気の利いた返しである。——

——清少納言は、お父さんの影響で漢学にも造詣が深かったので、この漢文も知っていた。その清少納言が仕えているので、定子様にも漢学の教養があったのではないかと思う。また、清少納言と定子様は仲が良かったらしい。このことをふまえると、定子が清少納言にしたこの質問は、「この漢文を覚えていますか？という、清少納言の知識を試した質問だったと考えられる。もちろん、この漢文を覚えていた清少納言は、漢文の通りに行動することで、「覚えていま

す。」という答えをしたのだと思います。——

この時点で、ここまでの解答が出てくることは予想外であった。「香炉峰の雪が見えるわけがない」→「それ以外に何か狙いがあるのだろう」と推測していく過程が見える。また、漢学の知識があることを「教養の高さ」とであると理解している。さらにその謎かけを理解「し合える」、つまり定子にも同様またはそれ以上の教養があり、高い者同士にしか分かり合えない、そのようなやり取りを「楽しさ」と認識できている。

後者の生徒も同様であるが、父親である清原元輔が学者であり歌人であったことを覚えており、そこから清少納言の教養、さらにはその清少納言が仕えている定子の教養の高さまでも推測することができた。そして、元から自身の持っていた知識である「清少納言と定子は仲が良かった」という情報を取り込み、自分の言葉で説明している。この「香炉峰の雪」の問いかけが行われた時期は定かではないが、「作者の宮仕え後まもない正暦五年(九九四)冬の事か。」(『新編日本古典文学全集 18 枕草子(以下、全集)』p.434 頭注)、「清少納言が宮仕えによりやくなれて、かつ中宮がその才能を発揮させようと誘導していられた頃の降雪」というと、『小右記』長徳元年正月二十八日条に「時々飛雪」と見える正暦五年晩冬から長徳元年早春の間の登花殿でのことか。」(『新潮日本古典集成 枕草子 下(以下、集成)』p.231 頭注 4)などから考えると、清少納言が宮仕えを始めたとされる正暦四年(九九三)の初冬から約一年後のことであろう。また、この同年の夏には大納言伊周が一条天皇や定子のもとを訪れて夜を明かしたという第二九三段「大納言まゐりたまひて」、翌年正月頃には中納言隆家が定子のもとを訪れ今までに見たこともないほど素晴らしい扇について話す第九八段「中納言まゐりたまひて」などの話があったようである(全集 p.524 年表)。そう考えるとこの「香炉峰の雪」の問いかけがなされた時期の定子と清少納言の関係性を「仲が良い」と表

すのは適当でないだろうが、それでも約一年の間に、清少納言の教養の高さが他の女房たちよりも頭ひとつ抜き出ていることを定子が認識していたのは事実であろう。

次に、本文「人々も、『さることは知りへべきなめり。』と言ふ。」までを読み、単語と文法を確認し、現代語訳に努めた。「歌などにさへ歌へど」については、「和歌に詠み込む」と解釈するか「漢詩を朗詠する」と解釈するか分かれる部分である。全集は「こうした情景をその詩句を引用して歌に詠みこむ。一節、詩句を朗唱する。」と記し(p.433 頭注 14)、『新日本古典文学大系 25 枕草子(以下、大系)』は「(この詩の境地を)和歌によむことすらあるほどだが。」と訳し(p.321 脚注 24)、集成は「朗詠さえするのに」と訳している(p.231 頭注 6)。また、菅原氏は「歌さへ」つまり「歌にまでも」と言う割りには勅撰集の中に香炉峰を詠み込んだ歌が一首も出てこないことに着目し、「女房が漢詩を朗詠する」という状況で本文を考えようと試みたがやはり違和感は拭えず、「以上のことを踏まえて大胆に解釈すれば、『歌』はやはり『和歌』と取り、『和歌』に歌うほど「香炉峰の雪」は教養の素材として一般化していたため、「人々も、『さることは知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそよらざりつれ。』という発言になった。」と苦しいながらも決定している(菅原、p.160)。また、今井氏は「うたふ」という単語の実例が歌謡、特に催馬楽に多いことから、「白楽天の詩をもととする歌謡めいた作が既にあり、広く歌われていた意をみるべきか。」としている(今井、p.20 注釈 4)。解釈の決定は非常に難解ではあるが、「歌」と表記している以上は「漢詩」ではなく「和歌」であると取るほうが生徒にも理解しやすいかと考え、授業者はこの部分を「歌などにまでも詠み込むけれど」と訳し、「人々(=他の女房たち)は白居易の漢詩のことは知っていて、その漢詩の情景を和歌に詠み込むようなこともしていた」と解釈を統一させた。そして、もう一つ解釈の分かれる「さべきなめり。」に関しては、音便の学習も含めて一度は「そうあるべきであるよう

だ。」と逐語訳させ、「宮仕えする人はそうあるべき」=「宮仕えするにふさわしい人」と繋げ、人々による清少納言への賞賛の言葉と解釈した。

以上を踏まえ、演習プリントの「第2回目」の欄に「なぜ清少納言は和歌を詠むのではなく、御簾を上げるという行動で返事をしたのか？」という問いを立てた。その際、好き勝手に推測するのではなく、必ず本文の中に根拠を持たせて論じるよう留意させた。またその一部を掲載したい。(波線部執筆者、原文ママ)

——和歌を詠むことはありがち(他の仕えていた女房も知っている)なパターン。また、定子も予想し得る行動。定子の期待を上回る為に原本である漢詩にある情景を再現することで、自分が突出した存在であることを回り(マ)にも定子にも認めさせた。——

——①いつもなら下ろしていないはずの御格子が下ろされているという点に目をつけたことを行動で示すことで、清少納言が周囲を注意深く見ていたことを表している。②他の女房たちは「話」をしていたため、言葉ではなくあえて行動で応えたところに“他の人とは違う”清少納言の知的さが表れている。③通常なら歌でしか詠まれないことを一瞬で行動で応えたことに、他者よりも頭の回転が速い清少納言らしさがみえる。——

——他の宮仕えの者たちは『炭櫃に火おこして、物語などして』とあるように、話をしていた。『少納言よ、』と定子は清少納言を名指しで指名したことから、清少納言は他の女中(マ)並の返事ではいけない(名指してくれた期待に応えねば)と感じたのであろう。(中略)人々も『歌などにさへ歌へ』ているのだから、漢詩を知り、和歌によみこんでいることを考えると、和歌で返す技術はたいいの人がとる手段で、定子へのアピールにはまだまだ不十分であった。——

「和歌を詠んで返すのは他の女房たちにも出来ることだから、それ以上の機転を利か

せた」という意見が多く見られた。本文最後の賞賛の場面から「周囲や定子に自分の教養の高さをアピールする、認めさせる」という内容も多くあった。また、「御格子を上げさせて御簾を上げる＝室内に冷氣が入る」と考え、

——歌えなかったり、歌うことすら考えていないということは、彼女の高い教養からは考えにくい。従って、歌わないという選択肢を清少納言が選んだということになる。彼女が御簾を上げた理由は、その前に記された本文にあると思うので、3行目の「仰せらるれば、」までにヒントがあると考えられる。状況は、雪の降るくらい寒い日に、戸や御簾などを閉め切り、炭櫃を囲んで女房たちが話をしているとのことである。この中で、御簾を開けると、もちろん冷氣が部屋の中に入ってくるだろう。しかし、定子もいるこの中でこのような反感を買うような理由で御簾を清少納言は上げはしないと思うので、よほど空気を換気してほしいという定子の意図もその鋭い頭脳で汲み取ったと考える。——

と、少し変わった解答にたどり着いた生徒もいた。「換気だけが目的であったのか？」という大きな疑問点はあるものの、しっかりと本文を読み込み、理解していなければ書けない解答ではあるだろう。

また、問いを考えていくうちに違った疑問が生まれてきた生徒たちもいた。

——宮中で仕えるならば相応の知識と同時に機転を利かせられないといけないということを他の女房に示す意図があった？ 自分の知識と機転を誇示し、自分の地位を高め、同時に仕える定子の評価を上げる意図があった？ 女房たちの能力値 up→サロンの評価 up→定子の評価 up——

——『例ならず御格子参りて』⇒いつもは御格子が拳(マ)がっているはず。⇒定子がこの質問をするために下げていた？ or この質問で上げさせたかった？ 清少納言がくみとった？——

サロンの評価が姫君の評価に繋がっていくことは、この段階で説明していない。生徒自身が本文を読み、当時の状況を考慮して立てた推測である。また、後者の生徒の疑問は、また次の問いへと繋がっていく。今回は演習プリントに組み込まなかったが、授業者が生徒たちにぜひ考えてほしい問いはもう一つあった。それは、「定子はどこまで予想していたのか」ということである。

——本文より、いつもと違って御格子も下りた状態にしてあった状態だったので(マ)清少納言は定子がそれをあげて回答しろというメッセージだと捉えたから。——

——定子は清少納言が教養がある人ということは知っているし、漢詩の知識をもっていることも知っている。この時に、「香炉峰」の漢詩について「清少納言が知っている」ということを定子は知りたいのではなく、漢詩を用いながら、定子が窓の外を見たいと思っていて、御簾を上げてほしいと思っていることをすばやく清少納言が理解したから。——

——(前略)また、せっかくいつもより雪が降っているのに、見ないのは勿体ない上、物語をさっきまでやっていたのに和歌を聞くのはつまらない。清少納言にしかできない特別な答えを求めていると考えられる。

(わざわざ御格子をおろしていたのはフリだった説もある) ——

——いつもと違って御簾が下ろしてあったことから、始めから(マ)定子はこれを望んでいたとも考えられる。——

定子は、意図的に御格子を下げていたのか。それならば初めから謎かけを準備していたということであろう。偶然下りていたとすると、「いつものように上げてほしい」というメッセージだったとも考えられる。また、定子は「少納言よ、」とわざわざ清少納言を指名している。清少納言ならば御簾を上げるという行動で応えるだろうと期待していたのかもしれない。このような解釈の可能性はすべて、不完全ではあるが一つの問いを考えていく過程で生徒たち自らが考えて

見つけたものである。この解釈について菅原氏は「この格子を誰が下ろしたのかが問題なのだが、謎解きとしては中宮定子が誰か女房か女官を使って下ろさせておいたとする方が面白い。(中略)しかし、こういう解釈をとっているのはどの注釈書にも見受けられないし、少し穿ちすぎているように思われる。『例ならず御格子まる』ったのは、よほど寒気が厳しかったのか女房の誰かが下ろしたと読むのが、文脈のリズムからして自然であろう。その格子が下ろされているのを中宮定子が見咎めて「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」と声を掛けた。」(菅原、p.158)と述べており、授業者も概ね同意見であった。しかし、生徒たちの自由な発想を摘まんでしまわないよう、今回の授業ではあえてこのような解釈を伝えずにいた。生徒たち自らが新たな疑問を見つけ、考え、そして新しい解釈にたどり着いていくというプロセスは、古典文学を読んでいく上で非常に重要な要素となり得るだろう。

③現代文『枕草子のたくらみ』

a. 学習への動機付け

本文プリント配布の際に、「今から入試休み期間中の課題を配るよ」と声をかけると、生徒からは悲鳴に近い声があがった。しかし、プリントを配布して、それが『枕草子』に関連する内容だと分かると、どのクラスでも生徒は一斉に静かになって黙々と読み始めた。古文での学習②が、本教材に対する学習の動機付けとしてうまく作用していたと言えよう。課題も全員提出し、もちろん不十分なところもあるものの、大多数の生徒が本文の概要を理解できていた。そこで、授業中は本文には記述されていない歴史的背景を補足しながら、本文を掘り下げて解釈していくことに集中できた。

b. 演習プリント「第3回目」の問い

そして、本文を読み進めていく過程で、演習プリントの「第3回目」、「なぜ清少納言は和歌を詠まずに御簾を上げるという行動で返事をしたのか?」現代文の本文に根拠を求めて記述しなさい。」という課題に取

り組ませた。『枕草子のたくらみ』には、定子に鍛えられた清少納言が、「ありきたりではなく、非凡なものを。右にならえではなく、自分の感覚で工夫して(山本、p.21)」や「前からあるものにそのまま頼るのではなく、時に応じ場に応じて改める。今・ここに最もふさわしい雅びを自ら工夫して創り出す(山本、p.23)」ような機知の才を有していたとある。ほとんどの生徒が、その本文部分に根拠を求めて、解答をまとめることができた。ただし、その解答の多くは次のようなものであった(原文ママ)。

——ありきたりではなく、非凡なものを、右にならえではなく、自分の感覚で工夫して、というのが定子という人の文化で、清少納言は定子が当意即妙なものを求めているのに気付いていたから。——

たしかに、この解答は、「現代文の本文に根拠を求めて記述しなさい」という課題の指示には応えられている。しかし、古文本文の内容が解答内容にあまり取り入れられておらず、「なぜ清少納言は和歌を詠まずに御簾を上げるという行動で返事をしたのか?」という問いそのものへの解答としては弱い。そこで、次の二人の生徒の解答を、模範解答として提示した(波線部執筆者、原文ママ)。

——清少納言は、前からあった漢詩にそのままたよるのではなく、雪が降っていて御格子が下がっていたその場の状況に応じて、御簾を上げる行動という非凡な発想をすることで、その場にふさわしい雅びを自ら工夫して作りだした。それをするにより、彼女の当意即妙さ、頭の回転のはやさを定子に伝えたかったから。——

——定子が後宮で説いてきた文化が、「前からあるものにそのまま頼るのではなく時に応じ場に応じて改める。今ここに最もふさわしい雅びを自ら工夫して創りだす。」というものだったから、「香炉峰下…」の漢文にあるものをそのまま言うのではなく、たまたま閉まっていた御格子との兼ね合いも含

めて、その場で対応したところを見せて自分の才能を見せたかった。――

先の解答と自分の解答とを見比べて気付くことはないか、分かりやすい理由は何か、を生徒に問うた。すると、「現代文から読みといたことを具体的なことに置きかえて説明すると分かりやすい」や「何が臨機応変なのか、古文と照らし合わせて考えるのが大事」といった意見がでてきた。本校の場合、解答のポイントとなる部分を探すのは得意な生徒が多い。しかし、それだけで満足するのではなく、生徒が答えてくれたとおり、現代文本文に書かれたポイントを踏まえて、古文本文の内容を再度読み返して考えてほしい問いであった。すなわち、自分の手元にある知識や情報を、他のものにどう活用させるかを考えてほしかったのである。この点においては、まだ力が及ばない生徒がほとんどだったが、そこまでたどり着いた他の生徒の解答を参考にして、どうすれば良かったのかを考えることはできた。

当初の予定では、作者や時代背景等を知ったうえで古文作品を再度味わい直し、清少納言の「御格子上げさせて、御簾を高く上げ」という行動を見た定子がなぜ「笑はせ給ふ」に至ったのか、もう一步深い読み取りにつなげたかったのだが、そこまでは時間的に厳しく、生徒が考える授業ではなく授業者が解説する授業になってしまうと判断して言及しなかった。

c. 演習プリント「第4回目」授業感想

その後、本文全体の読み取りを終えてから、演習プリントの「第4回目」として授業の感想を自由記述させた。以下に、生徒の感想を引用(波線部執筆者、原文ママ)しながら、考察を述べていく。

――今回の授業を通して、漢文と古文は深くつながっているのだと感じた。『香炉峰下』で出てきた香炉峰が古文で出てきたり、『枕草子』で漢学のことが出てきたりと、関係が深く、面白かった。古文の世界の人も今を生

きる私たちも同じ漢文を学んでいることが不思議な感覚になったし、古文を身近に感じた。これから親近感を持って勉強に取りくむことができそうです。――

――まず、事前に学んだ「香炉峰…」の知識を、古文の「枕草子」のより深い理解につなげられたことが楽しかった。定子と清少納言が漢学の教養が高いゆえに通じ合っている中に自分も仲間入りしているようだった。(後略)――

生徒は今回の一連の授業を通じて、平安時代の人々も自分たちと同じ漢文を学んで教養として携えていたことに気付き、それを追体験することができたようである。このことから、「親近感を持つ」たり、作中の後宮文化に「自分も仲間入りしているよう」に感じたりしながら、授業に取り組んでもらえた。そして、次のような感想(波線部執筆者、原文ママ)もあった。

――今回の古文・漢文・現代文の授業を通して、まずは歴史のつながりを感じた。昔の漢文の文章が、平安時代につながり、それが現代にも研究されている。このような学び方はしたことがなかったので、興味もわいてよかった。(後略)――

――小学生の頃から何度も枕草子に触れてきたけど、全部日本語訳についてだったとか、暗唱するために覚えただけとか、『枕草子』が書かれた背景について考えたこともなかったので、この授業を通してこんなにもたくさんの感情がこめられた作品だと初めて知れたし、より興味を古典に持てました。(後略)――

――ただ先生から、その文章に関連した部分だけ習うと、それぞれの事物はただの暗記対象でしかなかったけど、いろいろな文章とつながっていたり、一部が引用されたりしていると、当時の世界観や雰囲気はわかってよりいっそう心情がよみとりやすくなった。それに、古文と漢文を同時に読んだことで、日本と中国の関係なども知れて、「常識」がわかるようになった気がするので、古文に対するモチベーションが上がった。――

——色々な関連するものを読むことでその時代の背景や作者の気持ちを推測することができ、その文章に含まれる知らなかった意味に気づくことができた。作者は現代の読者に向けて文章を書いたのではなく、そこにいた人たちに書いたということを考えずにいたので古文や漢文は例題のようなものとして捉えていた。しかし、その時代の考え方や作者やその時代の読者を取り巻いていた環境を知ることでリアリティさが増し、暗記用語だった人も普通に生活し、文章を書いている姿が想像できるようになった。(後略)——

これらの感想のように、古文と漢文とのつながりや、それが現代にもつながっていることに気付いた生徒も多かった。そして、背景知識や登場人物の心情を踏まえて、様々な角度から一つの古典作品に触れることで、それまでの「暗唱」・「暗記」という古典授業への良くないイメージも払拭できたようである。その時代の人たちの生活や心情を想像しやすくなったことで、古典作品を、「リアリティ」のある、血が通った生き生きとした作品として味わうことができたのであろう。

「1.はじめに」で述べたように、文部科学省(2018)は、「古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないこと」を高校国語の課題の一つとして挙げているが、本授業を受け終えた生徒の多くはこの課題をクリアしていると言えよう。

また、各自の考えを「書く」ことを踏まえたうえで、クラスメイトと「話す・聞く」作業を進めた授業の手法については、次のような感想(波線部執筆者、原文ママ)が挙げられた。

——(前略)古文から定子の意図や清少納言の考えを想像したり考えたりするのはすごくむずかしかったけど、他の人の考えは根拠がはっきりとしていて論理的に文章にまとまっていてすごいなと思いました。他の意見

をきいたら、自分でも違う考えがたくさんでてきました。私は、音楽をきいて、その曲が作られた時代や作曲者の人生から、作曲者の思いを想像して色んな解釈をするのが好きで、今回の枕草子もたくさんのヒントから想像するのがとても楽しかったです。——
——(前略)自分の考えていた答えが、一般的に広く考えられている答えと違っていたりしたこともあったけど、しっかり考えることは大切であり、周りの人と見せ合うことで自分の視野を広げることができ、楽しく授業を受けることができました。——

自分一人で落ち着いて考える時間をとってから協同学習を行ったことで、思考の深まり・広がりが生じたり、考えることの楽しさを実感したりできる授業となったようである。

さらに、複数の教材を用いて一連の授業を構成したことについては、次のような感想(波線部執筆者、原文ママ)が挙げられた。

——漢文の白易居の詩を知らなければ、清少納言と定子様の雅びな遊びが分からなかったと思います。それが分かるか分からないかで、その作品を読み込む深さが変わりより楽しめるかが決まると思います。『枕草子』の原作、作中に含まれる漢文、考察の現代文を読むことで多様な視点を持つことができたと思います。ただ原作を読むよりずっと面白かったです。——

——香炉峰→枕草子、枕草子→枕草子のたくらみというふうに勉強していくことで、たぶんそれぞれの作品を単体で読んだだけでも絶対にここまで理解は深まらなかったというところまで深く作品について学べたと思います。前の時代のすぐれた作品に敬意を表す、という点は今も昔も変わらないことだと感じました。芸術(絵画、音楽等)を学ぶときによく、「その作品の時代背景を勉強するとよい」と聞きますが、文学作品も同じく、時代背景を学ぶことでより自分の中で解釈できるということがわかりました。——

——今回、漢文や枕草子、枕草子のたくらみを読んで、物は見方によっていろいろな解釈

ができることを学びました。もし、漢文を先に習うことなく枕草子を読んで、第一回の問いを考えていたら、私は「清少納言はふつうに外の雪はどうなっているのかと聞かれたとかん違いして御簾を上げた。なので定子は笑ったのだと思う。」と書いていたと思います。さらに、枕草子のたくらみを読んでいなければ、御簾が下りていたのは定子のたくらみだったのではないか、とか枕草子に込められた本当の意味も全く考えもしなかったと思います。漢文の“香炉峰下”、現代文の“枕草子のたくらみ”、古文の“枕草子”。これら全てを知っていて初めて枕草子に秘められた雅びを感じることができたと実感しました。また、多方面に作品を眺めて初めて筆者の真意に気付くことができ、「ああ、そういうことか。」とひらめいたときは、とても楽しかったです。――

これらの感想からは、文学作品の背景を知ったり、多角的な視点をもって作品に向き合ったりすることで、深い理解や学ぶ楽しみにつながっていったことが伺える。学習①の段階では、授業者が紹介した背景知識を用いて、やや誘導的に作品の解釈を深めていった感がある。しかし、学習②→③の段階では、『「ああ、そういうことか。」とひらめいた」等の感想に見られるように、生徒が手元の教材を用いて、自ら解釈を深めることができたと言えよう。だからこそ、学ぶことの楽しみにつながったのだと考えられる。

そして、ただ「楽しかった」という段階にとどまらず、学習全体への気付きをもう少し具体的に記述した感想として、次のようなもの(波線部執筆者、原文ママ)がある。

――(前略)小中を通しての「枕草子」の印象は季節を語った歌程度でした。しかし、高校で今回の授業をうけて、その考え方が180度変わりました。「枕草子」に込められた筆者の想いや歴史背景、そこには、「枕草子」をただ読むだけではわからなかったものがたくさんありました。これを機会に、自分は自分の目に見える範囲のことだけを考えるので

はなく、その事柄のもっと深いところについても考えていくようにしたいと思った。――
――漢文、古文、現代文とを横に繋げて学習することで、勉強する上での思考の幅が広がったように感じた。例えば、今回の第3問を考える時には、今までなら現代文中もしくは現代文の時間に培った知識を基にしか解答の根拠を検索するのといっぱいいっぱいで比較的浅い読みしかできなかった(であろう)が、今回は古文や漢文の時間に習った知識も用いれば、本文でおかれている状況を把握するのに苦労せず、その分考察も深まったような気がした。又、知識を定期的に呼び起こして利用することで、忘れることがなくなり、より深く身についたように感じる。他の分野の知識を総動員して一つの問題に臨むという考え方を忘れないようにして、他の教科に対しても適宜用いていこうと思った。――

自身の中で様々な知識がつながる・深まるのを実感することで、あらゆる物事に対峙する際に、多角的な視野をもって深い理解につなげていくことが大切であると気付いたようである。生徒自身が述べているように、この気付きを、今回の授業に限らず今後の学習や生活へ活かして行ってほしい。

また、生徒の感想には、スパイラル(らせん)的な学習を通じて、知識の定着および理解の深まりを実感したという記述もある。J.S.ブルーナー(1963)が「らせん形教育課程」の理論で述べているように、学習内容に「連続性と発展性」を持たせることが学習者にとって有用であることを、生徒の感想からも再確認できよう。

4. まとめ

本授業では、①複数の教材を読み重ねるなかで多角的に文学を鑑賞することと、②自分一人で「書く」作業を踏まえてからクラスメイトと「話す・聞く」作業に進む協同学習の形態とを大切にしてきた。先の第3部で考察したとおり、多くの生徒は本授業を通じて、自分の中で様々な知識がつながる・深まるのを実感し、古典教材への学習意欲を高めたり、多角的に物事を捉え

て事象を深く考えることの楽しさ・大切さに気付いたりしたようである。国語という教科は「現代文」・「古文」・「漢文」に分けて学習することが多く、本校の「国語総合」も例外ではない。しかし「古文」には当時の教養の一つであった「漢文」の知識が当然組み込まれているはずであり、その「古文」に触れてきた私たち現代人にも同様のことが言えるだろう。清少納言は白居易の漢詩を知っていたからこそ定子の謎かけに答えることができた。教科や科目を分断せず一つなぎのものと捉え、元から知っていることや新しく得た知識を繋げていけば、そのような清少納言の思考や行動を迫体験することができるのである。

これらのことから、本授業は、生徒が文学作品に「主体的」に関わり、作品やクラスメイトと「対話的」に関わる中で、「深い学び」を得られるような授業になったといえるのではないだろうか。すなわち、新学習指導要領で求められている「主体的・対話的で深い学び」に近いものが提供できたと考えられる。

また、本授業を IB の「10 の学習者像」と照らし合わせて見てみたい。先の授業ポイント②に挙げたように、今回は協同学習のスタイルを用いた。ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の理論で考えられているように、生徒が一人で到達できる「現下の発達水準」と、他人との協同のなかで到達できる「明日の発達水準」との間には、明らかな差異がある（柴田、2006、p.25-26）。本授業では、自ら「考える人」となるだけでなく、「心を開いて周り」と「コミュニケーションができる人」になり協同学習を行うことで、生徒は「明日の発達水準」すなわち、自分一人では到達しがたい深いレベルの学習に到達することができたと言える。このような学習を実現するためには、自ら考えたくなり、周りとのコミュニケーションをとりたくなるような教材選定や課題設定をいかにするか、ということが重要である。今回は、二人の授業者で協同して授業構成をしたことで、生徒の理解度や興味関心に応じた教材選定・課題設定を、より

綿密かつ丁寧に行うことができた。

ただし、本授業では、授業者が用意した教材の中で学習が完結してしまったのが、反省点である。本来の「探究する人」ならば、授業をきっかけに、生徒自ら「主体的」に資料をかき集めて「深い学び」につなげていくことが求められるのであろう。今回は一年生が対象であったことや時間的な制約等の都合で、その学習段階まで到達することができなかった。この点を今後の授業への課題として、生徒にとってより実りある授業が展開できるように研鑽したい。

5. 参考・引用文献

- 井筒雅風・内田満・樺島忠夫『新訂国語図説 四訂版』京都書房、2017
- 稲賀敬二・竹盛天雅・森野繁夫『新版四訂 新訂総合国語便覧』第一学習社、2016
- 今井久代『枕草子』『雪のいと高う降りたるを』段を読む』『日本文学』65(1)、2016
- 宇野直人・江原正士『漢詩を読む 3: 白居易から蘇東坡へ』平凡社、2011
- 齋藤希史『漢詩の扉』角川学芸出版、2013
- 柴田義松『ヴィゴツキー入門』子どもの未来社、2006
- 菅原敬三「教材研究と教材の扱い方(9)——枕草子際二百九十九段『雪のいと高う降りたるを…』——」『文教国文学』35-36 合併号、1997
- 文部科学省「高等学校学習指導要領(平成 30 年告示) 解説 国語編」、2018
- 文部科学省「文部科学省 IB 教育推進コンソーシアム」
<https://ibconsortium.mext.go.jp/>
(最終アクセス日: 2019.6.11)
- 山口直樹『図説 漢詩の世界』河出書房新書、2002
- J.S.ブルーナー『教育の過程』鈴木祥蔵・佐藤三郎訳、岩波書店、1963
- 『新潮日本古典集成 枕草子 下』新潮社、1977
- 『新日本古典文学大系 25 枕草子』岩

波書店、1991

- 『新編日本古典文学全集 18 枕草子』
小学館、1997